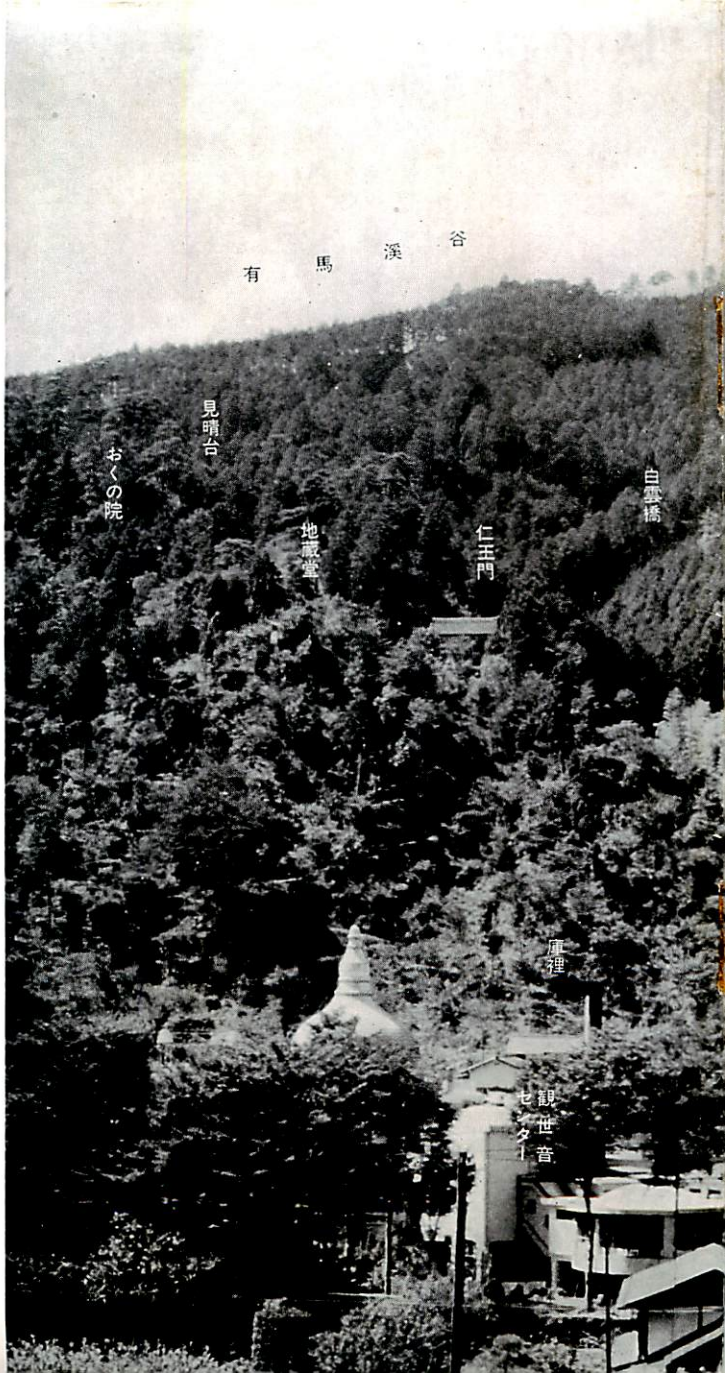


白雲山 鳥居觀音のしおり 6

四月一日発行





観音経の始めに「若し、衆生が色々の苦しみなどに悩んで居る時、一心に観音様の御名を称へて御すがりすると、観音様は其の声に応じて、直ちに其の人の苦悩を御救ひ下さる」と云ふ有難い大慈悲の御言葉があります。

「観音妙智力 能救世間苦」も此の意味を实によく現して居るので鳥居観音本堂の天井斜面に之を謹刻して納めてあります。

(此の書及び前号「風・林・火・山」御希望の方は御申込下さい。)

入間郡名栗村 鳥居観音寺務局

アラブ・地中海沿岸の旅路

桐江

(其ノ一) アラブ諸国の古跡群

中近東は、五千年前からの、世界最古の文化の発祥地で日本の文化にも、大きな影響があつて、私の憧れの地であり、又ユダヤ・アラブの戦跡も見られるので、NHKの「タイム、トンネル」の中に入った積りで、この幻想的な国々の、古跡や人情の中をさまよつて見たいと思ひ、妻と共に参加しました、一行は十二名で、旅行の日程は三十日間であります。

私達夫妻は最年長でもあり、砂漠で暑い処が多く、殊に飛行機を十数回も乗りかえるので、万一の場合を考慮して、一行の真似をして葬式費用ぐらいの飛行機保険を、面白半分にかけましたが、幾分気安めになりました。本号ではアラブの国々の古跡をしるします。

イラン国

九月七日、午前十時羽田を出発し、ベトナムのサイ

ゴン市に立ち寄りました。ここはメコン河のデルタ地帯で、北ベトナムのゲリラ隊がひそんでいる為、軍用機も練瓦のへいに囲まれ、空にはヘリコプターが舞い軍人がうようよとして、きんちょうした空気が感じられました。飛行機は太陽を追って行くので六時間時計を遅らせて、翌日の朝二時にイランの首都テヘランに着きました。

イランの東の国境は、アフガニスタン・パキスタン等、昔の仏教国で、玄奘三蔵法師が印度に道を求めるため苦労して歩かれた処です。

イランは人口二千五百万ですが、面積は日本の四倍もあります。其の三分の一は砂漠で、其の他にも遊牧の民が四百万も居るといふ、荒れはてた高原地帯であります。

首都テヘランでは、町の処々で鉄骨のアーチを造つて居りました。之は二ヶ月後に行はれる戴冠式の準備だとの事です。其の盛大な戴冠式の様子は、十一月二十日にNHKで報道されたので、皆様も御承知の事と

思ひます。

国王は国造りが完成する迄、戴冠式はしないと、十年余も延ばされた偉い方だけあって、新興国家の息吹が強く窺はれます。街にはビルが建ち並び、若い女性にはチャドルと云ふベールを脱ぎ捨て、膝上三種のミニスカートで颯爽と街を闊歩しており、全く新旧混交の都市であります。この若き女性も齡をとり醜くなれば又チャドルで顔を隠すでしょうと云っております。

博物館では四・五千年前の色々なものや、二千五百年前の大きな鉄の貨幣、ハムラビ法典を彫った楔形文字の石等、古い歴史を見る事が出来ました。又騒々しいバザール（市場）も見物しました。

町はづれに、アリの泉というオアシスがあります。

昔王様が水浴した処で、周囲の岩山には城塙の跡が残って居ります。水の少い国だけに、貴重な霊泉として子供が楽しみに水浴したり、絨毯を洗ったりして居りました。

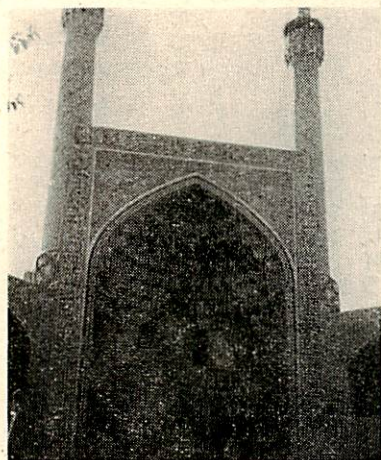
日中は三十五度を越す暑さなので、午后の三・四時間は休んで店を始めており、夜の涼しさを楽しみます。

私達も夜、野外食堂にいったら数百人のお客が、音楽を聞いたり、ダンスをするなど、実に賑やかで南国気分を充分に味わいました。

アラビアンナイト

飛行機で、南方「イスファハン」に行きました。

此処は魔法の小説で名高かい「アラビアンナイト」の雰囲気と色彩に満ちた、幻想的な町でありまして、或る食堂に入ったところ、柱・壁・天井など全部がカッタグラス張り、光を反射して目もくらむようです。ところが泊ったホテルは、其の数十倍もの建物が硝子・モザイク・画等の装飾でおおわれ、ベルシャ式の数十のシャンデリア等、実に豪華なのに驚きました。ところが「青のモスク」は、このホテルの何十倍もある回教寺院で、九世紀頃の建物であります。



ブル - モ ス ク

広い中庭をとりまいて居る五階建の四方の建物は、春・夏・秋・冬に住み良いように、太陽や温度を調節する様な工夫が取り入れられ、又内部の模様や色彩も四季に合ふ様に美しく輝く青石等のモザイクで張りつめられて居ります。又王様の便所は、水車で水を汲みあげる水洗便所式になって居るのには全く感心致しました。

建築様式は、イランとイラクは良く似て居り、回教文化の貴重な遺産として、流石に「アラビアンナイト」の国だけあると思ひました。

其の後、イラク国で、チグリス河畔の「千夜一夜」という食堂に案内されました。砂漠の荒野と斗つて、苦しみぬいて居るアラビヤ人が、夢に画いて居る様な魔法による奇想天外な絢爛たる、けんらん 状景を現した小説がこのアラビアンナイトであると云ふ先入感から、「千夜一夜」と云ふナイトクラブは、定めし夢の様な豪華なものであらうと、心をときめかして行ったところが暗く淋しい処で失望しました。

日本に帰ってから、この千夜一夜物語りを読んでみますと、或る王様が、多くの妻妾の密通におこつて之を皆殺にし、其の後は女性を独占しようとして、毎夜処女を一人づつ呼ばせ、朝になると大臣に命じて之

を殺す事三年に及んだので、若い女は国外に逃げ、残るは大臣の娘二人だけとなったが、姉娘は大臣の止めるのも聞かず、進んで王様の処に行き、朝方近く殺されるに当り、今はのきわに妹に話したい事があると、王様にお願ひして、そこで面白くて止められない話をして殺す時間を与へず、之をつづける事千夜に及んだので、始めて王様もその智慧ちえと貞淑ていしゆくなのに感心して殺す事を止めたと云ふ、世にも残酷ざんこくな悲しい、そして死に直面した女性が血のにじむような努力の物語りである事を知り、チグリス河の水面に町の光がゆれている河畔の「千夜一夜」といふナイトクラブの雰囲気がよく之を現して居たのに今更感心して居ります。

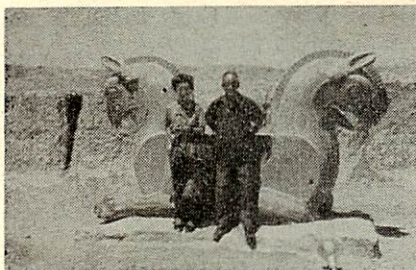
アラビアンナイトには、アラアアラアを称たたえる意味の言葉が沢山出て来て、面白く読んで居るうちに、いつか知らず知らず回教への信仰心が深まってゆきます。それに引換へ仏教には若い仏教徒の心をゆさぶる様な、大小説がない事は考へさせられます。

このイスファハンには、揺れる寺院があり、其の屋上で何十年も祈りつづけて居ると云ふ、仙人の様な行者が印象的でした。又珍らしい形の古代の橋とか、最も古い拝火教の寺院と、火を焚いて修業する台等が高い山の上に見えました。

ペルシャ王宮ベルセポリス

イスファハンから飛行機で、南方のシラスに行き尚五十軒の道を行くと、三千二百年前のペルシャの王宮ベルセポリスの遺跡が、地下から掘り出されており復元中でありませう。

シラスから十数軒の広い直線道路には、中央のグリーンベルトに花壇と、斬新なアークライトが整然としてゐるのが、ベルセポリスの廃墟と対照的で、木に竹を継いだ様な感が致しました。



柱の上の梁を支えている石彫

て来ているのか、印度王がペルシャ王を礼拝して居

ベルセポリスは、

ペルシャ帝国三代の

最盛期に建てられた

壮大な宮殿で、四方

の門には馬に人間の

顔や羽があるのや、

獅子と闘っている王

の像等八米もあるよ

うな、色々の美しい

彫刻とか、三十数ヶ

国の王が貢物を持つ

る等、ペルシャ帝国の偉大さを現した、沢山の彫刻が

ありますが、女性の彫刻は全く見当りませんのは、女は表面に出ない習慣からだとの事です。

この大きな神殿の、中央謁見の間には、高さ二十米直径二、五米もある石の丸柱が七十数本もあり、柱の上には、各々三米もある双頭の獅子とか牡牛とか鷲等の立派な彫刻が、梁を支えております。

この大宮殿も、アレキサンダー王や回教徒の破壊や地震等で、幾本かの大柱と、四方の大門が立っているばかりです。

この大ペルシャ国は、二千年の間ねむりつづけておりましたが、今は砂漠の多いイラン国として、石油のお蔭で目覚ましい発展の息吹が感じとられます。

イ ラ ク 国

十一日飛行機で、イランに別れて西方に飛び、イラクの首都バクダットに着きました。

イラクはチグリス川がペルシャ湾にそそぐ、メソポタミアの大平原で、砂漠の多いアラブの他の国には珍らしく、青々とした豊稔の土地が多い為めに、五・六千年前にシュメール人によって世界で最古の文化が、繁栄したといふ、考古学上最も重要なところでありま

すが、それだけに周囲の国々からねらはれて、興亡の甚しい処でもあります。

メソポタミヤは底地の為め、午后は四十三度位迄の高温となり、自動車の窓を開けると熱風が吹き込んで頭がボーっとする程の生れて始めての暑さには驚ろきました。其の為私の他二・三名下痢を起した程です。

バクダットは、アラビアンナイトの町であり、又シルクロードの中心地でもあって、現在発展途上において新旧混交（こんこう）している町であります。

此処には、ゴールテンモスク、国立博物館、其の他古代を忍ぶ史跡が沢山あります。

バクダットの南方三十五軒の処に、クテシオンの古跡があります。高さ三十七米・巾二十五米・壁の厚さ七米という世界一の大アーチがあり、其の両翼には五階建の宮殿が建っており、拝殿の広間には大アーチの下面に世界一豪華な大ジュエータンが敷き詰められてあったようですが今は城壁等も破壊され大部分は地下に埋れて現在発掘中であります。

此処で遊牧の民の、テント生活を見る事が出来ました。巾五米・長さ二十米位のテントで、移動する関係上、什器等は少ないのですが、男女の寢床は仕切られております。その老人が目の前で、小さな石臼で碎

いた、ざらざらのコーヒーを馳走してくれましたが、飲めた代物ではありません。然しイラクでは、上澄だけ飲むドロドロのコーヒーに良く出合いました。

クテシオンを更に南方へ、五十軒ぐらい「ナツメ椰子」の間を行ったところに、バビロン城があります。

王城の入口にはイシュタルといふ、名高かい門が新築されておりますが、本物は独逸にあります。

この門や発掘した城壁には、ドラゴンといふ、頭は牛、体は魚、前足は獅子、後足は鳥、尾は蛇、といふ珍妙な動物の彫刻が沢山ありますが、之は各動物の長所を取って、信仰の対象としたものです。

この王城は、バビロニア文明の発祥地（はつしょう）で、当時は世界最大の都市といはれたが、モンゴルにせめこまれて一夜にして廃墟になったと、云はれております。城壁の高さ九十米・巾二十五米・長さ七軒もあって、その間に、望楼が二百五十ヶ所、城門が百ヶ所といふ雄大なものであり、内部には三・四階建の市街地等があり世界七不思議の一つである、空中庭園（てんくわん）があったといはれるような大遺跡である事は、その残骸（ざんがい）によって相像されます。

十四日バクダットから、飛行機でシリアの砂漠の上を飛び、レバノンの首都ベイルートに着きました。

レバノンは滋賀県ぐらいの、小さな国ですが、西は地中海に面し、東は二千米のレバノン山脈なので、雪どけ水で、一年中国土が潤って居るため、緑に覆われた気候の良い処で、海水浴とスキーが同時に出来るといふ恵まれた国であります。

此処は、シルクロードの中間地だけに、各人種が混血して居り、宗教も回教とキリスト教が、ほぼ同数の為、大統領はカソリックから、首相と議長は回教徒から選出する習慣になって居ります。

又自由国である為め、海岸の市場では関税がかかりません。殊にアラブ諸国は絨毯の国だけあって、その市場が最も盛んでした。

この国には軍用機が二機しかなかったので、今度の戦争でも逸早く単独で、イスラエルに降服しました。

西方の峠の斜面には、名物の傘松の森林の間に、何万とも数知れぬ別荘やアパートが、散在して居ります。が、峠近くには、一日に三億六千万円の収入があると云ふ、石油王の立派な別荘があります。毎日その様な大金が入ったら、どう使ったら良いかと気が遠くなります。アラブ諸国の多くは、一年に冬の間の一乃至三

ヶ月の雨期以外は、雨が降らないのです。殊にエジプトの如きは、十二年間に一度も雨が降らなかった処があるとのこと。その為冬は青々としているのに、夏は茶色となる処が多いので、レバノンは、アラブ各国のオアシスとして、皆別荘が此処に集まるとの事です。この別荘地帯を登って千八百米の峠を越すと広々とした平原があり、色々な果物や、沢山の野菜が実っていて、味覚をそそります。

パールベックの神殿

この高原の向ふに、名高いパールベックの神殿があります。

二千年前に東ローマ帝国が、三百年を費して造ったといふだけあって、実に広大なもので、中央には高さ二十二米・直径三米・千噸もある、世界最大の石柱が数十本もあつたのですが、今立っているのは六本だけであります。

この巨大な石を、エジプトから運ぶのに、一本の柱に四万人を要したとの事です。石段は巾十五米の二十段が一個の石で出来ており、その他五百噸ぐらいの石が積み重ねられており、その中に千五百噸といふ四角い大石があるのには驚ろきました。



パールの神殿

この神殿は、大陽等三つの神を祭ったもので、生贄いけにえを捧げたといふ石台が中央に残っております。

バックスの神殿・ビーナスの神殿等の壁面、柱等には美しい彫刻が一面にあつて、その中にクレオパトラや

美人の像が沢山あります。これ等は皆赤・青・黒・白等の御影石で出来ております。これらの神殿の周囲には、外敵を防ぐため巨大な城壁がめぐらされております。

この大神殿も、アレキサンダー王・十字軍又はアラブ等により破壊されたのですが、何しろ大石で造られているので、神殿の形は良く残つて居ります。

この国で、ジプシーの天幕生活を見物しました。ジ

プシーは、フラメンコ等を踊りながら、各国を巡業して歩く流浪流浪の民で、遊牧の民と同じように、国境を自由に越す事を特に許されて居ります。

エジプト

九月十六日飛行機でレバノンと別れて、戦時中の為スエズ運河をさけて遠廻りをし、エジプトのカイロに飛びました。

機上から見ますと、ナイル川の両側だけ緑なのに、それ以外は見渡す限り茶褐色一面のゴビの大砂漠であります。昔はこの砂漠の中にもオアシスもあり、又町の遺跡もあったとの事ですが、砂漠の猛威により姿を消し、現在では人間の住める処は、全面積の僅か3%しかなく、二千五百万の人口がナイル兩岸に集まって居るので、人口密度は日本の三倍だとの事です。

ナセルが上流のアブシンベルの古跡を水中に没してまでも、アスワンハイダムを完成しこの砂漠を緑地化しようとするのもうなづけます。

この世界最大のダム工事は、英仏の資本で建設中でしたが、ナセル革命により英仏が引き揚げたので、ナセルが、スエズ運河を国営とした為め、英仏と争いがあつた事は御承知の通りです。其の後はソ聯の技術導

入により、南北五百軒と云ふ長大な人造湖のダム工事が着々と進められており、之により砂漠の何%かを沃野にする事が出来ると云つて居ります。

ユーカリ樹等珍らしい大木の街路樹の間を四十分位西南に行くと、ラムセス二世の顔のスフィンクスがあり、その横に十五米もある王の石像が倒れて居るのを寝たまま其の上に寺院を建てて見物させて居ります。

ピラミットとスフィンクス

次は五千年前のギーゼのピラミット群と、大スフィンクスを見に行きました。このスフィンクスは顔は王様、体は獅子で、天然の岩を彫刻したもので、長さ七十五米・高さ十八米と云ふ巨大なもので威圧されます。ピラミットは、全部で八十一あるとの事ですが此処から見えるのは五つ位でした。

最大のサオト王のピラミットは、基礎十三エーカー高さ百六十米で毎日十万人の労力で、三噸乃至三十噸の石を三百万個積まれてあり、丸ビルの五倍の容積があるとの事です。この内部の狭いトンネルの階段を登ると盗難防止の落し穴や、通路を防ぐ大石を取除いた跡があります。之を登りつめる事三百段で、王の石棺や宝物を入れたと云ふ室が数ヶ所あります。

このピラミット等の写真をとろうとすると、ラクダに乗ったエジプト人が大急ぎで前に立ち塞がり、チップを要求して実に厚かましいが、彼等にいわせると競争の為観光客が少なくなり食って行けないとの事で、気の毒でもありました。

ここから十軒位離れた処に、最古の階段式の破損したピラミットが四・五ヶ所あるのも見物しました。

十八日カイロから飛行機で、南方にナイル河にそつて三十分位飛び大昔のエジプトの首都であつた、ルクソールに行きました。

王家の谷

ルクソールのホテルの横から、渡舟でナイル河を渡り、自動車で二十分行くと、黄褐色の岩山の麓に王家の谷があります。この岩山の附近には、王様の墓が六十七ヶ所もあるが、未だ数ヶ所は発見されて居ないといふ事です。

先づツタンカーメン王の墓に入つて見ました。この墓はその上にあつた、王の墓を盗賊が掘り出した岩石でうづまりわからなくなつて居たのを、今から四十年前英国人が永年根気よく掘りつづけて遂に掘り当てたとの事です。

このお墓の小さな杭道を二百米位まがりくねって下
って行くと、盗難を防ぐ為の迷路や偽装室まであり、
又通路や各室の石壁や石柱は、見事な色彩の彫刻や絵
でうづまって居ります。

ツタンカーメンは十八才で死亡したので、墓は他の
王様の何分の一と云ふ小さなものですが、ここから出
た二千五百余点のぼる豪華絢爛たる遺品は、カイロ
の博物館の大室四ヶ所にぎっしりつまっています。

先年上野の博物館で公開された、ツタンカーメン展
は其のほんの一部に過ぎません。

王の棺は八重になっており、其の外箱は六畳座敷ぐ
らいあります。八つの棺は皆純金をはりつけて、美し
い彫刻がしてありますが墓の通路が狭いので穴の中で
組立てたとの事で、之を分解して取り出し又組立てる
のに十三年を要したとの事です。

次にその上のアメノス二世の墓に入って見ましたが
之はツタンカーメンの五倍の大きさ故、ここにあった
貴重な宝物は実に莫大なものだったらうと思ひます。

其の他二ヶ所のお墓を見ましたが、階段の上り降り
が大変で、其の上外に出ると四十度以上の暑さで、皆
へとへとなりました。

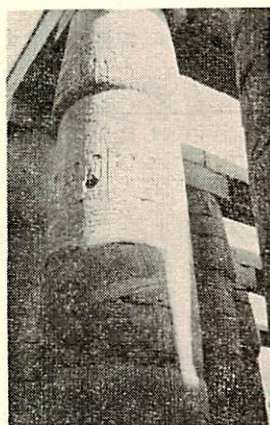
王家の谷から五十軒離れたところに、ハトシエブス

ト女王が造った葬祭殿が奇岩を脊にして、前方はナイ
ル河を一望に眺められる処に建っております。

この女王は政治力があつたと見えて、夫の王を隠退
させて王位に就き、この神殿を建てたが、死後夫が再
び王位に就くと、前方の建物を破壊したり女王の彫刻
は顔を皆削られて居るのは惜しい事に思いました。

カールナック神殿

ルクソールの町はずれに、カールナックの神殿が、



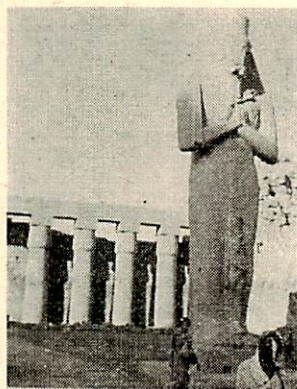
カールナック神殿の大石柱

祭るアモシラー神殿が中心となっており、歴代の王が
千年以上を要して、増築に増築を重ねた跡がよくわか
ります。総面積は実に八十二エーカーと云ふ膨大な神殿
であります。

入口にはラムセス二世の巨像があり、だんだん奥に

ナイル
河畔に
聳え立
つてお
ります
この
神殿は
大陽を

進むと、中央に高さ二十五米直径三、五米といふ今迄見た中で最大なハイコ式石柱が、百



王様の巨像

三十四本も林立して全く威圧されます。この柱は百三十四の神をあらわしたものです。そしてこの室には千人も入りまして、王様・高官・外国の使者・其の他のは入れる場所が厳然と区分されて居たとの事です。

「夜中にこの中に入って行って御覧なさい。暗いあちこちの室から、五千年前の人々が現れて壮麗な行事をする有様が見られますよ」とガイドが云ふ程、神秘的な幽気が漂っており、肌寒いものがありました。

尚奥に進むと、王や女王、其他の巨像が沢山並んでおりまして、上流のアスワンのアブシンベルの神殿もかくやと思ひました。

其の外に三十三米のオベリスクがありますが、その一本はパリーのコンコルド広場に移されております。

このオベリスクは、王様が死ぬと不死鳥となつて、

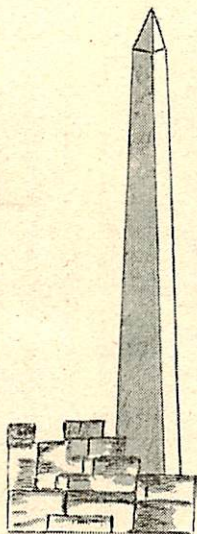
世界を飛び廻り、時々この先端で羽を休めると云ふ信仰からです。

このカールナック神殿から、四軒離れた処に、ルクソール神殿があります。四千年前の建物で外部のハイコ式石柱は実に美しいものです。

この両神殿の間の道の両側には、頭が羊・体が獅子の石像が四軒も並んでおり、年に一回王様が此の間を行列したとの事です。定めし壮麗なものだったらうと思ひました。

この遺跡は三千年も地下に寝っておったので、現在の人は太陽の神など知らず、信仰の対象にもなっておりません。尚ナイル河にそつて二時間上流に行き、最も完全な形を残している、エスナ神殿、鷹を祭つてあるエドフの雄大な神殿も見物しました。

オベリスク



次のしおり七号には「アラブ連合の興亡史」「イスラエル・アラブの争ひ」「各宗教の事」等を書きます。

西遊記

記 (其の一)

(一) 石から生れた猿

遠い昔のこと、もうろうとした、煙ともゆげともつかぬものにとざされて、天も地も見さかいがつかないころがあった。

やがて軽いものは浮き上り、重いものは沈下してかたまつた。そして天が出来、地が生れた。

太陽も、月も、星も生まれ、雲が飛び、風も吹いた地には土が積り、山が出来、川や、海や、森が出来、そのうちにどこからともなく、けものが生まれ、やがて人間も生れた。

いつか、世界は四つに分かれていた、即ち東勝神州西牛賀州、南瞻部州、北鉅蘆州である。

その東勝神州の海の中に、傲来国ごうらいこくと云う国があつてその近くの島に名高い花果山と云ふ山があつた。

花果山の頂上に、見上げるほどの大きな石が、つやつやと黒光りして突立っていた。

ある晩のこと、傲来国を、ものすごい嵐がおそつた

のである。

花果山の木はへし折れ、砂利はとび、海からよせる大波は、島までもさらっていくかと思はれた。

風は大きなうなりを立て、山の上の石をたふいた、すると石は真二つに割れて、中から一匹の猿がとび出して、やをら両うでを高く挙げて、立ちあがり、何か大声でさけんだが、風の音で聞きとれなかつた。

その翌日、嵐は去つて、素晴らしい天気になった。その猿は目から金色の光りを放ち、森や谷を見て、「世界は広くて明るいな」と一人言を云いながら、そこらを歩るきまわつた。

花果山には、昔から猿が沢山すんでいて、猿たちは突然出現した、石から生れた猿を見て、さも不思議そうに、遠くからじろ／＼と眺めていた。石猿は、その不思議がっている猿達の中へ何のおそれもなく、とび込んで行つて「今から仲間入りをするぞ」と胸をはつて云つた。

花果山は一年中、美しい花が咲き、木の実がなり下がり、どこへ行つても喰べるものに、不自由すること

は全くなかった。

ある日のこと大勢の猿達はこの山を下りて、ふもと
の野に遊びに行った。

そこは山と異って、静かな眺めで、野の中を流れて
いる川の水はすみきって、きれいである。猿達はこの
川上へぞろ／＼歩いて行
った。

やがて谷も深くなっ
て、突当たったところに、
大きな滝が勢いよくおち
ているのを見た。そして
滝には美しい七色の虹が
かかって、滝つぼの辺は
水しぶきにぬれていた。

「きれいだなあ」石猿
は、そう云って滝つぼを
見おろした。

「やあふかい、ふかい
この滝つぼは、どんなこ
とになっているのかな、
誰か滝つぼに飛びこん
で、その様子を探るもの

はないか」

「そんなことわ、ごめんだい、その様子を知りたい
なら自分で、もぐったらいじゃないか」

「よしきた、とび込んで見せよう。だがな、はい
前に、お前達に約束があるのだがどうだ」



石猿は、そう云って猿の仲間を見渡した。

「俺が無事にこの滝つぼの様子を見てもどつたら、このおれを王様と呼んで、何でも云うことをきくか」

「いいともよ、約束するよ、猿はうそなど云うものか」

「よしきた、それなら見ておれ」

石猿は、滝の落口のしぶきにぬれている岩かどに立って、両手をあげて、体をおどらせ、滝つぼにざぶんと、とびこんだ。

石猿はがーんと頭をなぐられたように思ったが、おちる水に強くうたれたためで、あとは無我無中、力いっぱい両手と両足を動かして泳いだ。それはどの位の時間かわからないが、いつか体がらくになって、気がついてみると、砂の上に、のし上っていた。

「はてな、ここはどこだらう」。

その砂の原に、一すじの道が、長長と、続いていった。石猿は元気ものなので、おそろしいとも、無気味だとも思わず、その道を、ずんずんと進んで行った。

しばらく行くと道ばたに、石の柱か立っていて、柱には水れん洞と、字がほってあった。

「この先には誰がすんでいるのか、仲間をつれて、出なおしてくるとしよう」。

石猿は、廻れ右をして、仲間の猿達がいるところへもどつて来た。

大勢の猿達が走りよって石猿を取り囲んだ。

「水は深いか？」底はどんな様子だ？」

石猿は、今見て来た不思議なところのことを話した。

「水の底には、水れん洞と云う所がある、そこへ行って見たいものは、前へ出る、連れて行ってやる、そして、何かいいものがあったら、行った者だけで山分けた、勇気のある者はついてこい。」

「行くぞ、おれも行くぞ、おれも」みんな賛成した。ざぶんざぶん、猿達は、先をあらそって水におどりでんで行った。

「水れん洞」と文字の彫られた石の柱の先に、鉄の橋がかかっている。橋を渡り切ると、立派な住居が見えてきた。入口から石の段があって、その奥に広間があり、台所がつづいていて、そこには台所用具がきれいに取り揃えてあり、くらしに必要な物があるばかりでなく、いす、しん台まで、きちんと並べてある。

「すてきだ、すてきだ、仙人でもいるのかな。誰もすんでいるようすもない、あき家らしい、こうしておくのももつたいない。われわれの家にしよう」

石猿は、おくまった、高いところのいすに、どかりと腰をおろして、「さて、家来ども」とさも王様らしい声で云い出した。

「やくそく通り、今日から皆の王様になるぞ、お前達を家来と呼んでも不平の者はいないだろうな」。

やくそくだから、どの猿とて不平を云うものはない
「へい。かしこまりました」

ほかの猿も、皆一様に頭をさげるだけだった。

石猿はそこで王様になった、即ちただの猿でなく新しい王様の猿となった。

それから、水れん洞は、もう猿達の領分となった。

猿達は、昼は花果山に登って、いろいろの木の実を食べて、よく遊び、夜は水れん洞の石の寝台で、のんびりとねむった。

だが王様は、誰知るともなく、こっそりと泣いていることがあった。

王様は何故、泣くのだろうと家来の猿達は、不思議に思った、どう考えて見ても、その訳はわからない。

ぜいたくな暮しをして、毎日大威張りで家来達の猿を使っている王様猿に、泣くような理由はないのだが、

どうしたことかと、どの猿も首をかしげるばかりであった。

ところが王様猿には、一つの心配があったのである。それは、只命がおいしいと云うことで泣いて居たのである。いくら王でも、次第に年はとるにきまつている、体もおとろえ、歯がぬげ、目がかすみ、耳が遠くなり、ついには、死ななければならぬ。

「死ぬのはご免だ、千年も、万年もいやそれよりも

生きたいものだ」

王様は、赤い顔を涙でぬらし、ぼろりと落ちる涙をこすりながら、考えた。

「おお、そうだ。不老長生の術と云うものがあって、その術は仙人のみが知っているとか、よしその仙人に、会いに行こう。そして、不老長生の仙人の術をさづけてもらおう」

そして、王様猿は、はじめて、ほっとした笑いを浮べたのである。

それから、数日の後、家来の猿達に訳を話して、水れん洞のすをたのみ、ただ一匹、何処にすむのかわからない仙人を探しに旅に出かけて行った。

(二) 石猿の旅

石猿は、筏にのって、海に出た。それこそ生れてはじめての旅だった。住みなれた花果山が、波の向うに

見えかくれするのを、背のびしながら、いつまでもながめては又筏をこぐのであった。やがてそれも見えなくなつて、広い海ばかりとなつた。時時海面をかすめとぶ鳥と、空を走る雲だけが心をなくさめる。

王様猿は淋しくなると、不老長生の術を探るのだと心に云つてはどうやら、氣をとりもどすことが出来た。筏よ早くすすめ、不老長生の仙術を知る仙人の処までずんずんと――。

筏は風に吹かれるままに、流れ流れて、三十三日目に、南せんぶ州の西北の海岸に、吹きつけられた。

「やれやれ、有難い、有難い、久しぶりに大地をふむ事が出来たぞ」

王様猿は、目をかがやかせ、こどりしながら、びよいと陸にとびうつた。

海岸には島の漁師達が網を引いて、魚をとつていたが、急に現われた王様猿を見ると、おどろいた。

「わっ、大きい猿が来たぞ、かまれたら大変だ、それにげろ、にげろ、」

みんな一目散にかけ出したが、一人にげおくれた。

「まっけてくれる、話をきいてくれ」

王様猿は、にげおくれた漁師に大声で云つた。

「わたしをおそろしがることはない。わたしは不老長生の術を知つてゐる仙人を尋ねて、わざわざ遠くから来た者だ、たのむ、仙人のいる処を知つてゐるなら、教えてくれないか。」

「仙人だつて？」

漁師は、頭を左右にふつて、

「仙人のことなら、子供の頃から、話には聞いてゐるけど、まだ見たことはない、どこにいるかも知らない。」

「ふーん、いないか……そうか」「それでは、たずねるあてもない、何だか、体が寒くなつて来た。お前の着物はあたたかそうだ、わたしにくないか。」

毛むくじやらな手を、漁師の方へ、のぼした。

「えっ。」と思わず、漁師は二、三步あとずさりした。

いやだと云えば、するどい、つめで、引つかかれるかも知れない、とびかかつてきて、とがった白い歯でかみつかれるかも知らない、漁師はこまつて、しぶしぶと着物をぬいだ。

「しかたがない、持って行け、その代り、これから
は、こちら辺を、うろろろしないでくれ、女子供がこ
わがるから」

「はっはっは、わかった、わかった、着物をもらっ
たら、もう何もしないよ、だいじょうぶ」

王様猿は漁師の着物を着て、浜をすたすたと歩るい
て行った。すると向うに山が見えて来た。漁師は、こ
の辺には仙人はいないと云ったが、もしかしたら、あ
の山にいるかも知れないと考えたのである、それは昔
から仙人は山に住むものと聞いていたからである。

そして山を目がけて、山から山へ、谷から谷へと、
毎日仙人を探して歩るいているうちに、もう九年もた
ってしまった。

「いない、こゝはだめだ」

王様猿は、南せんぶ州をあきらめて、ふただび筏に
のつて海を渡り、今度は西ぎうが州へ行った。

ここでも沢山の山の中、谷をめぐって、仙人のいそ
うな所を探し求めた、すると道ばたに石の柱が立っ
て、文字がほつてある、そばによつて見ると、

「三星洞」と読むことが出来た。

尚も進んで行くと、立派な見上げるような門があつ
た、王様猿はほつとして、「こゝが、仙人のすまいかも

知れぬ、どれ門をたたいて見よう。」

そこへ一人の子供が現われて、手をあげ、王様猿を
呼んでいるようだ。

「子供よ、わたしに、用なのか。」

「うん、用があるから呼んだのさ、お前さんは、水
れん洞から来た、王様猿だろう。」

「うん、そうだよ、あたったよ、いかにもわたしは
水れん洞から来た者だが、一体お前は何だ。どうして
わたしがわかったのだ。子供の姿はしていても、本当
は怪物ではないのか?。」

と思つて、じりじりと近づいて行くと、小供はひょ
いと、一足さがりながらにたりと笑つて、

「怪物なんかじゃないよ。お前さんのくることは、
ちゃんとわかつていたのさ。うちのお師匠様がおっし
やつたのだ。お師匠様はな、ぼだい祖師様とおっしゃ
る仙人だ、それ位のことさ、あさめし前のことさ。」

「えっ仙人だつて。するとお前は、仙人のおでしだ
つたのかい。これはこれは。」

王様猿はことばをいいねいにして

「知らぬこととは云いながら、失礼しました、おゆ
るしてください、この通り。」

(七号につづく)

花の白雲山

庫裡まへやまの前山に、百数十本の梅林がありまして、その奥まったところに、お稲荷さまの赤い祠ほくらがあります。

その祠にお参りすると、二月の始めというのに、もう紅梅が、二・三本ばかり冬枯れの林の中に、くつきりと美しく咲き匂って、春を呼んで居ります。

三月ともなれば、この附近の梅林が、白く山を色どりまして、そのあたりを、そぞろ歩きしたあと、庫裡のペランダの暖かい春陽のもとで、たゞよいくる梅の香にむせびながら、お茶を一ぶく、いたゞくとなんとなく俳人ならずとも、句心がわいてきます。

本堂裏の、竹林をぬけて、埴輪式東屋に行きますと附近の梅林は、谷川をはさむ山あいなので、少し遅れて開きますので山桜の咲く頃まで花を楽しめます。

この東屋からながめますと、何とも云えぬ静寂さで浮世を離れた心地になり、一句ひねりたくなる処です。

四月ともなれば、あちこちにある数

百本の山桜と共に、高山でなければ白の「一つ花つゝじ」が先づ春の訪れを告げるように、目を楽しませます。

之に競うように、数知れぬ深山の紫色の「三つ葉つゝじ」が、あちこちに群がって咲きほこります。

又五月頃は色々の「赤のつゝじ」で山を色取りますし、六月には天然記念とされている「紅どうだんつゝじ」が、可愛い鈴をつらねたように咲き下ります。もえでるような、新緑の間に咲きほこる色々なつゝ



三蔵塔に登る自動車道

じをめでながら、子育地藏尊から仁王門、奥の院等へのお参りをすませて、其の上の、見晴台に立ち一息入れますと、左手の谷あいはずっかりつゝじにとりかこまれて、目のさめる程の美しさで、しばし見とれざるを得ません。見晴台に心を残して、うつそうたる杉檜の老木の間の楽な参道を進みますと、前方の山頂に、木のまがくれに、白亜の三蔵法師の霊骨塔が、くつきりとそびえたっており、足も自然に軽くなります。

三蔵塔附近も、つゝじが多く咲き乱だれて居りまして、塔の四階から眺めた、白雲山全山の美しさは、之が都心から僅か二時間の距離にあるところとは、一寸と信ぜられぬほど、雄大な景観であります。

尚足に自信のある方は、こゝからトーテンボールの立っている石段を登って、白雲山最高峰の琴平神社にお参りをして、さらに「そね道」を奥に、秋葉山の祠の附近に行きますと、南に深く雄大なる有馬溪谷があり、東は天気の良い日には東京迄見えるような、武蔵野の平原が広がって居りますし、北方へ目をやると、秩父連山から、雪のアルプス等峨々たる山々が眺められて、実に変化に富んだ雄大なパノラマ台であります。この往復は三蔵塔から一時間みれば充分ですから、是非ハイキングして見て下さい。

昨今は特に若い方々のご参拝が多くなって居ります。ハイキングの途次、本堂に立ちよられるのでしよう。寺院の者に

「何が祭つてあるのですか」

とよく尋ねられます、観音様の事などに関する知識がなく、それが現代では当然なのですが、寺院の者が良く説明して上げますと

「仏像つて皆んなお釈迦さまばかりだと思つていた」と新しく得た知識を大切に、繰返し／＼尋ねられるのに、忙しい日などには嬉しい悲鳴を上げることもあります。

又三蔵法師の霊骨塔では、若き日の玄奘三蔵法師の信仰と知識に対する、情熱と勇氣、未知に対する探求、が何かこの若い人々の心のなかに共感をうむのでしょう、こゝまでの疲れを忘れ、皆軽やかな力強い足どりに戻られます、それが信仰へ一歩近づかれた事になるのです。そして、再び白雲山にお参りに来られる日も、そう遠くないでしょう。

三蔵塔から、傘型東屋のところを、近道して下ると水野梅曉禪師のお墓や、埴輪型東屋迄の間にも、色々なつゝじが咲き競つて居ります。

その谷間に、今高さ四十余尺の支那門が、八分通り

出来て居ります、完成のあかつきには、玉華門として
一入風情をそえる事と存じます。

除夜特別供養会

ラジオ、テレビによって毎年にぎやかな、紅白歌合
戦が放送されて、それが終ると除夜の鐘の音が聞かれ
ます。どなたも行く年を振り返って、先づ無事に過し
得た事を感謝し、そして来る一年を無事息災で送る事
が出来るよう、神仏に御祈りなされる事と存じます。

除夜の鐘を聞く時は、新しい年を迎えるのだと云う
何とも云えない身の引締る思いがするものです。

鳥居観音でも毎年大晦日には、特別供養会を執行し
て、除夜の鐘をならして居りますが、本年も午後十一
時半より関係者十数名本堂に参集し、観音経をとこなへ
ながら百八の鐘をついて、新しい年を迎えました。

新年の祈禱会

鳥居観音では毎年新年祈禱会を、一、二、三、の三日
間執行しています、年末までに広く篤信の方々から祈
禱の申し込みを受けました処、三百余名の方々から申
込がありましたので、願意、御氏名を記したお札を、
本堂祭壇にお供へして、おごそかに御祈禱致しました。

そのお札の手配に事務局は年末、年始、多忙でし
た。この新年祈禱会には、十年以上毎年ご参拝なされる
方が百数十名、いらっしゃるのには敬服のほかありま
せん。

本年は特別静かな三ヶ日で、気候も暖かく東京方面
からご参拝になった方で、名栗は暖かい処だね、とオ
ーバーまで脱いで塔へ行かれる程でした。

新年の故か若い和服姿の参拝の方々が、おみくじを
お引きになってほぐえみながら読んでいらっしゃる、
情景も新年には又格別ふさわしいものです。

春の観世音センター

昨年の夏にセンター前の広場に来た、廻転大観覧
車からは三蔵塔も見え、豆自動車ではお子様達がたの
しそうに運転してはしゃいでいる、と思へば洋弓場や
バズーカーの遊技場では、それぞれの人がねらい競っ
て的にいどんで居ります。

又センター北側に廻れば名栗川のほとりに鱒釣場が
あって、数知れぬ鱒が銀鱗を春光に輝かせながら遊泳
している、その中に釣糸をたれて、しばしを楽しむ人
もあってのどかな風景であります。

暖かいセンターの大広間では、春の日長を終日楽し

もうと云う人達が、舞台のマイクさばきよろしく歌や民踊に、にぎわうのも、人の気も浮き立つ春たけなわの頃が一番楽しそうでありますし、大風呂に浴し、窓下の名栗川を眺め、ゆっくり温泉気分に浸っているところ近くの川瀬から玉をころがすような、河鹿の声がきこえて来るのも今頃からであります。

鳥居観音講について

鳥居観音の講中が、各方面の、ご熱心な方々の御協力を得て、次々に結成されまして、一年余りで、講数三十、講員二千五百名を数へるようになりました。

このような多くの方々に鳥居観音を信仰していただき、社会の良き指導者としていつまでもご活躍願えれば、必ず将来益々平和と光明が、与へられることと信じ感謝申し上げる次第であります。

講中の御参拝の折には、事務局へご連絡があり次第ご接待に万全を期して居りますが、手狭で思ふよう参らなかつた事もございましたことと、お詫び申し上げます。

飯能から名栗への県道も、年々良くなっております。車での御参拝も「楽しいドライブ」と云へます。特に講中のご参拝には入園、入場等に特典があります。

すので、今後尚一段とご信仰と共に、一日の清遊も兼ねてお越しをお待ちしております。

春季雑詠

勅賜禪師九十三との御賀状	とみ子
御年玉欲しそうにして行儀よく	全 人
観音の七体春にさんぜん	狂句朗
草薙の一っ一々に瞳を慰やす	雲 声
流行の髪型つけて花の旅	全 人
いくばくの花を咲かせて梅老いぬ	浦 八
春灯の隣り嬉しい笑い声	金 鈴
観音の慈顔春日に笑み給う	千 昭
太りくる寛の水に春の音	全 人
碑の古び霊山仏地杉の花	細 月
眠り込む霊峰裾は水温む	全 人
春雷や秩父の嶺々に日矢降らす	新 月
春の雨盆石の艶浮き立たす	呆 人

鳥居観音のしおり 第六号

発行日 昭和四十三年四月一日 每号 定価 貳拾円
編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八―一五 武州印刷株式会社
印刷所 鳥居観音 電話名栗(〇四二九七〇五)五番
発行所 鳥居観音 電話名栗(〇四二九七〇五)五番

秋葉山

面白岩

→ 観音滝

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目傘四阿

権輪起四阿

梅曉之墓

栂月橋

本堂

鳥居文庫

名栗川

